

生存科学研究 ニュース

VOL. 6. NO. 5. 1991. 9. 10. 発行

発行：財団法人 生存科学研究所

〒104 東京都中央区 銀座4-5-1

聖書館ビル 303

電話 03-3563-3518

平成3年度 第2回医薬問題研究会 メンフクロウの音源定位にみられる 情報処理能力について

7月8日(月)午後3時より5時迄研究所
会議室において平成3年度第2回(通算第6
回)医薬問題研究会が開催された。

今回の発表者は上智大学生命科学研究所
所長青木清教授。演題は「メンフクロウの音
源定位にみられる情報処理能力について」。

青木教授は、専門とするニューロエソロ
ジー(動物の行動を神経生理学的な方法で解
析しようとするもので、行動生理学と呼ばれ
る)の立場から、メンフクロウの捕獲行動の
観察や聴覚の上位中枢である脳神経系の研究
と、そこから得られるメンフクロウの音源定
位に対する情報処理能力の解明について報告
した。

メンフクロウはその捕獲行動に当たり、視
覚は用いず、専ら聴覚によっている。聴覚系
の末梢器官である耳は左右で位置が異なり、
また顔面全体の羽毛はパラボラアンテナのよ
うな形で音源を知るのに都合のよい構造にな
っている。末梢から上位中枢である下丘外側
核に到達する過程で音源の時間差と強さに応
答する2種類の経路が存在することが分か
り、層状核は音源情報を素早く処理するた
めに特殊な構造をもつことが分かった。この構

造は他の動物でも同じである。これ等から細
胞レベルの化学的プロセスとして「認識」を
とらえることができてきたと言えよう。

人間はあらゆることが知能行動に基づいて
いると言えるが、動物的本能行動があつて知
能行動があるのであり、そこに動物とヒトと
の間の連続性がうかがえる。ニューロエソロ
ジーは精神現象を理解するのに近い分野にあ
ると言えるから、その分野の研究が進むこと
は、広範な学問の統合でもある「生存科学」
が基本的な課題とする、「人間の自然科学的
理解」に繋るであろう、というのが青木教授
の考えである。

* * * *

次回は、9月2日(月)午後2時から。報
告者は、日本製薬工業協会専務理事代田久米
雄氏、演題は、「日本における医薬評価機構
の現状と問題」の予定。

平成3年度 第2回家庭問題研究会 東西の養生

7月31日(水)午後6時より、平成3年
度第2回(通算第6回)家庭問題研究会が開
催された。

今回のテーマは「東西の養生」で、神奈川
県立衛生短期大学教授小玉香津子委員が「西
洋の養生」について、青梅市立総合病院小児

科副部長江川委員が「東洋の養生」についてそれぞれ発表した。

小玉委員は、養生は健康のための手段であると前置きしたうえで、ナイチンゲールやヘンダーソンの看護に対する考え方を紹介、養生法は看護法であると指摘し、さらにその源流をなす6非自然要因、サレルノ養生訓、ガレノス、ヒポクラテス等に言及、理論的衛生学と実践的養生法との位置関係について述べた。

江川委員は、荘子、句子の文を引用しながら、「養生」は「羊+食」と書く、生(命)を養う、長寿を保つようにすることであると説明し、中国の養生論と日本の貝原益軒の養生訓とを紹介した。これ等の考え方は、人間の健康があってその上にこそ社会の健康が成り立つという考えで、人間一人一人が自分で健康になることが基本となっている。特に貝原益軒は「人身は尊くして天下四海にも代え難し」と言い、人間の尊さを身体の尊さにこめ、精神修養というような心のあり方を重視した従来の考え方に対し、より実践的に述べている。養生論は現実を肯定し、生きていることを謳歌するための人生論であると考えられる、と述べた。

* * * *

次回は、9月19日(木)午後6時より。発表者は早稲田大学社会科学部田村貞雄教授。テーマは、「『立川市医療保健計画』について」の予定。

第3回

環境・保健・産業問題研究会
地球環境問題と日本の貢献

8月12日(月)午後2時より、第3回(平成3年度第3回)環境・保健・産業問題研究会が開催された。

発表者は地球環境産業技術研究機構、研究企画室長深山英房委員で、テーマは「地球環境問題と日本の貢献」。

深山委員は、オゾン層の破壊、酸性雨、砂漠化、熱帯雨林の破壊、温暖化、有害化学物質の国境間移動、海洋汚染、野生生物種の消滅等の広がりをもつ地球環境問題の中から、地球温暖化に的を絞って報告した。先ず地球温暖化防止に対する国際的な動きとして、トロント・サミットからIPCC(Intergovernmental Panel for Climate Change)の中間報告、気候変動に関する枠組条約、国連環境会議等を、次いで温室効果ガス排出の実態、2000年における温室効果ガスの排出レベルを1990年並みにとする各国の温暖化防止のアクションプログラムを紹介し、さらに地球環境保全に関する関係閣僚会議やヒューストン・サミットにおける「産業革命以来200年の債務を100年払いで返済」という地球再生計画を紹介した。欧米は当面気候変動のメカニズム解明を指向しているが、科学技術を通じた日本の貢献としては、一人当たり、GNP当たり環境負荷排出量の少なさ、環境技術、省エネ技術等の移転促進、革新的技術の研究開発等があると述べた。

最後に、地球環境産業技術研究機構の役割について説明したのち、報告者自らが作成した「地球温暖化とその対策技術」の表に従いながら、その全体について、現在進行中の主要な技術開発に重点を置きながら説明をおこなった。

* * * *

次回は、10月14日(月)午後2時より。

北上・九州プロジェクトの近況
ほか研究所近況

ニュース前号で報告した北上プロジェクトの安家・沢内村訪問、九州プロジェクトの大分訪問に引き続き、今後の研究推進にむけて準備が進められている。そのほかの研究所の活動近況と一緒に報告する。

* * * *

- 7月18日(木)：武見国際シンポジウム
第2回実行委員会
- 7月20日(土)：北上プロジェクト・保健・医療・経済分析のための準備的検討
- 7月23日(火)：人間・文化・文明研究会
準備会
- 7月27日(土)：基金・表彰・助成委員会
同：広報ワーキング会議
- 7月31日(水)：アルメイダ病院吉川院長
と協議
- 8月1日(木)：北上プロジェクトの今後の
研究の進め方について打ち合わせ
- 8月10日(土)：岩手県今泉町済生会病院
柴野院長を迎えて現状や問題点の検討
- 8月12日(月)：武見国際シンポジウム
第1回組織委員会
- 8月15日(木)：北上・九州プロジェクト
に関連して武見思想の映像化の検討
- 8月28日(水)：沢内村病院加藤先代院長
と協議
- 8月31日(土)：アルメイダ病院吉川院長
と再度協議

第5回武見国際シンポジウム
準備の近況

平成4年に行われる第5回武見国際シンポジウムは、日本で行われる第3回目のシンポジウムであるが、今回は準備段階で日本からの全武見フェローが参加してフェロー自ら主題を選定し、シンポジウムでは各国からの武見フェローによる発表・討議ならびに財団からの武見思想の紹介が予定され、これまでの武見プログラムの成果を問いただるものとなるであろう。

* * * *

武見思想の紹介のためには、国外からのフェローの理解を助けるために、武見思想やそれを追及する生存研の活動の映像化と、事前にフェローに配布するべく武見論文の中から主要なものの英訳が準備されている。

なお組織委員会での検討の結果、ニュース前号で紹介したシンポジウムのオープン日(会員が参加できる日)等の計画は一部変更される予定。

日本からの平成3年度武見フェロー

既報のごとく平成3年度(第8回目)の日本からの武見フェローは、長崎大学医学部助教授(公衆衛生学) 門司和彦氏で、氏はこれまでインドネシア・ジャワ島の人口過密地帯とボリビア・アンデス高地における人口と環境資源関係の影響に関する長期の野外調査を行ってきたが、その調査による「人類生態学的研究」を基盤とした地域保健計画の立案という研究テーマを携えて、ハーバード大学公衆衛生学大学院武見国際保健講座に参加するためボストンへ向かった。

「武見太郎の主要論文集」
第1集の残部があります

多数の武見太郎先生の論文の中から、編集委員会が主要なものを数編厳選して作った論文集(第1集)の残部があります。御希望の会員へは可能な限りお分けいたします。実費(700円)を頂くこととなりますが、御入用な方は研究所までお申し込みください。

第1集は「医療資源の開発と配分」に関するものを中心に選んであります。

現在武見フェローにシンポジウムの前に読んでもらうために準備中の第2集は「地域医療」を中心に選んでおります。

計報

生存科学研究顧問松前重義東海大学総長が8月25日 御逝去されました。謹んで御冥福をお祈り申し上げます。

